

61 Blue Spring



komasen333

追憶の果てに追憶

ゆるやかに下る坂道

少し汗ばみながら振り返ってみても

あの日の影が揺らめいている

もう一度 無理だとしても

優しく佇む影は消えない

人込みに紛れ

面影求め彷徨い続け

眩し過ぎる太陽 静かに受け止め

燃え始めた追憶の影

世渡り上手

優しい人は弱い人

ここに入った時からとっくに気づいていた

優しさは取り繕うことができるもの

強さは叩き込むしかない

理不尽な世の中

不条理な世の中

言葉は正直そのもの

安易な答え

すがりつけば片付けやすい

己より劣るものを探し

己の優位性を求めつづけていく

君だけの僕

気づいてほしくて
でも気づかれたくない
重なり合うことを恐れ
踏み出せないまま過ぎてゆく時間

いつかと似た風景
飽きることもなく繰り返している

触れられることを恐れている
本当の自分がばれそうで

必死に取り繕うことしかできなくて
理想のままでいなくちゃ

いなくちゃ

君の前には君だけの僕
会うたび崩れる心の殻
素直になれるほど器用じゃなくて
僕だけの僕が消えていく

FRESH MARINE

悲しげな瞳にどこまでも惹かれていく

時間という大きな籠から

いつのまにか

揺れ落ちてしまったような感覚

どこか寂しげな横顔をそっと見つめていた

何度見ても飽きることなく

見つめるほど想いは深まり

切なさは増していく

振り向いてほしくて

でも気づいてほしくなかった

この想いが放たれてしまったら

もしかしたら気づかないフリをされるのかな

どうしようもないくらい

伝えたいのに

知ってほしいのに

この想いは心の殻の奥へ逃げていく

欲を言い出せばきりがないけど

ただ見つめる日々は限界

いつか気軽に話し掛けられる日が来たら

無理だとしても

今日みたいな星のきれいな夜は

願わずにいられない

繰り返す季節

最後に魅せられた笑顔
今も瞳の奥で揺らめいている

取り残され
ただ見送ることしか出来なかった

遠ざかる景色だけ縁取ってゆく毎日
良いことばかりじゃなかった
それでもすべては色濃いまま

初めて並んで歩いた日
映画のワンシーンのような桜並木
手を握るのさえ戸惑った2人

少しずつ忘れていく
良いとこと悪いとこをいくつか残して

それは仕方のないこと

再びすれ違うときには
ほとんど覚えていないだろう

それは自然なこと

忘れていく中でも

残るものは必ずあるから

過去にしがみつくなのは1人でいい

初めて出会ってから
めぐりめぐって訪れた3度目の春

この思いを桜吹雪に託す

Calm scenery

霞みゆく景色の中で ゆるやかに進む針

無くしたものは すべてそのままに

胸の奥に眠りつづけていた想いが

今、止めどなく溢れていく

言葉にできなかった願いは

忘れ去られた時を照らし始める

邂逅の雨が歴史の地を潤し

明日の花を呼び覚ますように

日々の狭間から

君が想う以上の世界はもう来ない

でも君が思い浮かべる景色はすぐに見えてくるさ

あれこれ考え出すときりがなくて

複雑さに気が滅入ってゆくばかり

そうは言っても

明日には忘れちゃってる

確かなものなんてありやしないのに

手を伸ばせばいつか掴めると

信じて疑わない純粋な心？

不確かなものは暗闇に隠れてるとは限らないでしょ

明日になればすべてが変わるわけじゃない

そりゃあ少しは変わって見えるかもしれない

よく見てごらん

瞬きを忘れるほど 目を凝らせるなら

fake to fake

たしかに あの時嘘をついた
後味の悪さを必死に消し去ろうとした

悪い癖として見逃してきた言葉
そう あの時嘘をついた

あの時 言った言葉が
嘘なのかどうか分からない

すべてが溶け込んだ今

今なら思い出せる

今なら許せるはず

時の流れが全て受け止めてくれた頃に
もう一度思い出してみよう

そんな甘い予測
どうして許したのだろう

そう たしかに
あの時嘘をついたんだ

嘘をつくたびに
ねじれる微笑を

どうしようもないくらいに
ひどい言葉を

月日とともに記憶は
あの言葉たちを

心のそこから
癖になった笑顔を

昨日も同じようなタイミングで笑いあった

誰も気づくことのない 仮面

なかなかやるね...

冬空の感傷

一度でいいから

あなたと手をつなぎ

3人一緒にこの寒空の下

歩きたかった

聞こえない声

見えない笑顔

キミは今どこにいるのだろう

きっと近くにいるよね

消えてしまった姿

求めつづけるほど

思いはあふれだす

いつまでも2人っきりの現実

吹きつける風は

今も変わらず冷たいよ

ユークリッド庭園

あの時を繰り返しながら
あの場所を歩いてゆく

憂いに満ちた接吻を繰り返しながら
深く強く堕ちてゆく

冷めることのない夢を見ながら
醒めない夢へ瞬いてゆく

色褪せた光
ひとときの快樂へのトラップ

眩く彩られた円の下
こぼれるほどの笑み

引きちぎった絆さえ
愛しく思える

そんな空

あるよく晴れた空の下

静かに世界を眺めていた

すべてを見逃さないように

必死にもがいてたら

疲れた

苦し紛れに

涙をうかべてみる

神様にでもなれそうな

空でした

捧げれる限り

捨て去る勇気がほしい
あなたというすべてを

もうこれ以上
進めないとしか思えないとき

ふとよぎるその笑顔

誰のものかわかっていたのに

捧げれる限りの愛を花束に摘めて

夢のまま終わらせないためにも

すぐれるものがほしい

たとえば

よどみのない囁きに包まれるような

面影を追い続けている

振り切るつもりはなくとも自然と加速は増していく

冷静に対する焦燥

重なる瞬間

想いは静寂へ投げられた

鼓動を抱きかかえ

俯くことしかできないまま

言葉のない思想逃避が繰り返される夜

捧げられない愛と引き換えに得たのは

何ひとつ知らない無邪気な笑顔

ここにいる意味を与えてくれた

君という思想

それは僕そのもの

儂き夏

疲れ果てた夢
青い空に浮かべ
雲の切れ間に隠そうとした8月

叩きつけるような雨が
浅はかな思いを
打ちのめしてくれると信じていた

早く 綺麗に 遠くまで
速く きれいに 彼方まで

現実から夢が消えた

涼しげな季節を呼び寄せようとしても
この暑さは決して忘れられない

散らばる白の四角い欠片
点在する緑の区画の海

寝転んで触れてみたい
いつかのように 何も知らないままに
今でも残る雫の跡

小さく 大きく 揺れる向日葵
優しく 強く 揺れるヒマワリ

夢から現実が消えた

許された時の短ささえ
振り切ろうとする蝉時雨

想奏 ～擦り切れた旋律～

相変わらず何をするにも優柔不断
去り際に残して言ったことば
今も感わされてる

聞き慣れた声
やけに冷たく響く夜
零れ落ちるしずく掻き集めてみても
その跡は簡単には消えない

奏でて 夢の先
描いて 胸に流れるメロディー
教えて 今以上はやってこないと
言って 夢は見ているものだと
抑えて 鼓動を揺さぶる声

どうしても拭いきれなくて

心は揺れるばかりで

忘れるなんて無理なわけで

1つになれなくてもこのままでいたくて

ありふれた今を飽きるほど抱きしめても
君だけを想い続けている

ナニヒトツ

あの煙が見えないと言い切れる

あなたの心はきっと病んでいる

ナニヒトツノコラナイ

少しくらいほっといてくれよ

皆が同じようなことを受け入れるとは限らないだろ

ナニヒトツカワラナイ

複雑怪奇な文明
進化と退化は紙一重
立ち止まることさえ憚れる

ナニヒトツカワラナイ
ナニヒトツノコラナイ

そうさボクはこの上なく
恵まれているよ

ナニヒトツノコセソウニナイ

深夜のドキュメントの子どもたちを見る度に
自分のふがいなさにうなだれているよ

ナニヒトツカエレナイ

革新と破壊がすべてだとして
出来る限りの方策をあぐねている

途切れた部屋から

何か言うべきはずなのに

言葉は虚しく響くばかり

どうして君は綺麗なんだろう

取り繕う行程さえも絵になってしまうね

焦っているのは僕

どうして僕がここにいれるんだろう

落ち着いた顔で何を考えているんだろう

文字を打つことしか出来ないなんて

気づいてくれなくていい

静かに見守るのが僕の使命なんだろう

この部屋の空気を作り出しているのは僕自身

奪うのも破るのも僕自身

ゆるやかな風に乗って

どこまでも途切れない空
朝に昇る太陽 夜に昇る月
どこにいても落ち着かない
どこまで行っても変わりそうにない

山あり谷あり
いつまで経っても報われない
それぞれの限界を知ったとき
落ちないために登らないことを覚えた

つまらない、夢がない
そうなのかもしれない

際限なく広がる欲望の渦
賢明な選択と言えなくもない

「よーい、スタート！」

降り注ぐ日差しに迎えられ駆け出したんだ
やわらかな陽だまりの中で揺れる花に手を振ったんだ

横一線に繋がれた掌
あうんの呼吸のように歩幅はそろっていた

緩やかな風に飛ばされた帽子
色鮮やかな季節へ誘ってくれた

誰かの「行こうよ」があれば
それだけでつながってられるような日々

流れる時と景色の中でも
抱えたものは確かに残っている

それに気づけば
振り返ることを少し忘れてみればいい

上れるとこまで上ってみればいい
見下ろせばきっとすごい世界が待っていると信じて

いつかそこから落ちていく定めとしても
それはそれで味わい深いはずさ

行けるとこまで行ってみればいい
誰かにとっての理想となるために

走れるとこまで走ってみればいい
胸を張って逢える日を迎えるために

前に進めなくなっても
這いつくばってみせる この生ある限り

自由の下に生まれたから
不自由を知ることが出来た

ゆるやかな風に乗って ハイスピードな未来へ

リゾーム【rhizome】

そろそろ終わりにしませんか
この2人でいる意味がわからなくなる前に

満ち足りない無菌室で枯れかけていた花

潤いを与えてくれたバタフライ

夢の中では素直になれるのに
口に出るのは罵声ばかりだった

扉の奥に広がる現実
無知と無関心のしっぺ返し

与えられた自由をオリジナルだと言い聞かせ
歩き始めた歴史は見解の相違に埋もれていく

自己決定の尊重は身勝手なアイデンティティを野放し
自己責任で片づける無関心

見つめるのが怖かった
何もわからなくなりそうで

真夜中に響くサイレン
いたずらにここを揺さぶり笑う

どれくらい時間が経てば
今日の涙を思い出に変えられるだろう

いつの日か隣で手をつないだ人に
こんなこともあったと 語りかけているのだろうか

いつの日か抱える小さな命に
肩車でもしながら聞かせているのだろうか

3 m四方の管理保護区域
残された楽園に一陣の風が吹く

雲の飛行船で太陽へ

そよ風に揺れる花のようになれば
もっと優しくなれるかな？

涼しげに咲く紫陽花
見つめる横顔
流れるように降り注ぐ雨
優しく包まれていく

君の言う退屈な日常
それは僕のあこがれ

何気ない瞳のその先に広がる世界
そっと覗いてみた

いつもの見慣れた景色
不思議なくらい鮮やかに流れていく

「ただ空を眺めていただけ」

笑ってごまかす声は
嫌な事を吹き飛ばしてくれる
透き通り響く旋律のように

真っ白に伸びた飛行機雲
まるで夕焼けへのプロローグ

未来へつながる螺旋は果てなく続く

無邪気な笑顔

世界も表情を崩す

何気ない仕草

その1つ1つに救われている

君のことばかり考えている

何をするにも

君の視線が気になる

今日この頃

その瞳に映るもの

すべて掻き集めて少しずつ近づいていく

君が「きれい」と思うものを

「きれい」と思える心を持つために

Sleeping in the car

ゆっくりと傾けられた首筋

気づかないはずはないけど

気づかないまま

その髪先 触れるたび

心 揺れ動いた

穏やかに閉じられた瞳

その奥の意識はどうなっているの？

その心 全てお見通し・・・

そんなわけにもいかないから

今日もこうして黙っているのです

すやすやと試されているのかな

惑わされてばかり

優しく包んでみたくもなる

涼別

外は雨降り 夢は後ずさり
懐かしさに儂く揺れ続け
刹那に添うは奏でていた貴方

「無駄なことなんて何一つない」

さりげないその声に胸を突かれ
強く言い切るその姿に惹かれていった

あなたの背負うもの全て代わりに背負ってあげたい

できるわけない

わかっていたから 平気で言い切れた

涼しげにさよなら 最後まであなたらしく

七色の景色の果てで 夢は夢のまま

微かに震える指先
かじかんだわけでもなく
恐れているわけでもなく

淡々と掻き鳴らす横で 黙々と書きつづけていた

「また会える」

何気ない一言と屈託のない笑顔
誓い合ったあの日だけ遠く

君の抱えるもの全て代わりに持って上げる

できるわけない

わかっていたから できるように演じてた

ただ信じてほしかった

そっとさよなら 狂おしいほどに

七色の空の下 叶えてくれると信じてる

涼しげなさよなら

最後まで 見惚れていた

Should fall to go

すべって 転んで 落ちればいい
ざまあみろ！って嘆いていれば 怖がるモノなんてありゃしないさ

つきつめたところで リアリストにはなりきれない

どうして才能は目覚めないのか？

眠り続けるのが宿命とでも言いたげ

タイムリミットがはっきりしたら真剣に走り始めるのか？

いや、あきらめるだけだろ？

死にたくなるとき

意味のある言葉を投げかけれるようになりたい

すべって転げるうちに落ちとかなきゃ
成功も失敗も曖昧になりかねない

明日にでも死にたいとき

前へ振向かせる音を聞かせれるようになりたい

覚悟だけが「決めかねている」と呟き

首を振る

お前次第なんだ 進むためにはいつだって

I don't have a dream

どうか教えてください 僕はどうすればいいんでしょう？
お願いします 何になればいいんでしょう？

わからないんです 自分自身が...

無為なまま浪費してきた時間
ゲームみたいに今すぐリセット... 戻れるなら戻りたい

人生は取捨選択の繰り返し やりきれない
今まで捨ててきたもの とてももったいなく感じるこの頃
未知なる世界への希望 隠されていたように思えて仕方ない

もしあの時 捨てずに持ち続けていたら...
そんな「if」に耽っています

こんなに過去に捕らわれているのに
拾い集める勇気 躊躇い続けている

とにかく教えてほしい 何を言われても構わない
とにかく変えたい この現状を

恵まれすぎていたのかもしれない
それなりにしていれば乗り越えてゆける...
楽観的過ぎたのかもしれない

特別な者に憧れ続けてきた
他人とは違うことがしたくてしょうがなかった

才能を疑いなく信じてきた
きっと思い上がっていた

秘めたる可能性にかけてきた
スタートラインに立つこともなく

結局逃げつづけてきた
だからまだここにいる

ありふれた日々を見くびっていた
ありふれた日常はこなして済ませてた

あれもしたいこれもしたい
努力も犠牲も伴わずに

嘘ばかりついてきた かまってもらうために

自分探してってキリがない
アイデンティティって抽象的
自己確立って自信に立脚している

自業自得と承知の上で今日もグチる

「 You have a dream? Is it truth??... 」

explanation

間違っちゃいない
進むべき道の途上 立ち止まり言い聞かせ
振向いてばかり

器用に生きるのは思いのほか容易い
不器用を貫き通すのは忘れがち

予定していた場所にはどうも届きそうにない
カッコつけてみても 全て折込済みとはいかないみたい
どうあがいても 形勢逆転は望み薄
あきらめたほうが無難でしょ

思い描いてきたよ いつでも 夢を
ウソじゃない もう届かないけど

ここにきて一度殴ってくれないかな
そうすればどうしようもない自分を変えられる気がするんだ

少しだけ背伸びしていれば
それなりに褒めてもらえた頃も過ぎ
行き着く場所にも見放されている今

意義なんて抽象的なもの望めない
愛なんて勝手なもの信じられない

まだまだこんなもんじゃない 強く言い切れるように
都会の真ん中であの風景を夢見ているよ 今日も

思い描いてみせるよ これから 確かな未来を
思い叶えて見せるよ いつか 儂き理想を

ここにもう一度来てくれないかな
そうすれば何かが変わるって保障はないけど

ネガティブ

「どこまで走れるかな」
ふと思い起こした瞬間 目覚ましが宙を舞う

時計の針は意味をなくした そう思えるんだ今は

ある日突然思いついたアイデア
明日にでも飛び出したい気分
どうしてかな？
明日にも死にそうな予感

バツの悪そうな表情
気づかれないとでも思っているの？
そこまで鈍感じゃられないよ

弾まない会話
きっかけは何だったかな

Goodbye Tomorrow
もうあきらめるよ 僕には合いそうもない
キミの心はどうなんだろう？
もう見放されていたのかな あの夜には

追われてばかりの毎日
何に急ぎ立てられる訳でもなく
カッコ良くトーストをかじって

飛び出す時間さえなかった朝

素直に言えてたなら

今頃その笑顔を隣で眺められたのかな

転がる朝日に何を願ったんだろう

教えてくれなくていい

聞かせてくれないかな

Goodbye Sunshine

ひきこもるわけじゃない

少しだけ冬眠 そんなところさ

「いつまでもここにいてほしい」

こんなこと言う自分があるなんて...

これもキミのせいかな

恥ずかしげもなく照れることもなく

素直にできたあの頃 もう戻れないね

Goodbye Mine

なけなしのイマジネーション

弱くなりそうな夜 小さな写真を手がかりに

意味もなくさいなまれる

あの日交わした言葉をあの場所でもう一度
夢はやがて泡となり浮かび始める

出きる限り...

遠すぎるあの場所に辿り着くまでは
もう一度振向かせてみせる 眩い輝きの中から
向こうで微笑んでくれているように思えるから

ポジティブにゆこう
あなどれない毎日だからこそ

浮かんでみせる
どうしようもないくらいに
澄みわたる青に抱かれるように

サイクリング

いつまでも今日を生きよう どこまでも今日をゆこう
飛び疲れたらそこまでなんだよ

傷つくことに慣れすぎている
吹きつける風に思いを重ね 遅すぎる現実にタメ息混じり

リモコンで 簡単に換えれるんだ
マウスで 消せるから怖いんだ

泣いて叫びたくもなる 笑って褒められたくもなる
人間だから

最先端の悲しみの中

叫んでいた 何となく
恐れていた 理由もなく

ひた走る太陽を振り切る術もなく

答えなんてわかるはずもないけど
吹きつける花びらに　生きる意味を
儚き季節に委ねている

時よ　今ここで終わりを告げさせてくれないか
幼さだけが取り柄なんだ

吹き寄せる花びらのように舞い散れるなら
自然とペダルも力強く

ゆらめく季節の先で　あきらめにも似た焦燥に駆られ
切なさだけを頼りに　華やいだ香りに包まれてゆく

ベッドで　深いから　悩むんだ

海辺で　見つめてくれるから　嬉しいんだ

切なさで　胸が　痛いんだ

夢で　逢えるから　苦しむんだ

I break you

想像は遙か

海のように深く 空のように高く

解き明かされないコードが
ほどもかけた2人を引き寄せあう

I break your melody

すべての情報を支配したい

優しげな微笑に震え
夜の淵へ追いやられていく

I break your voice

息の根を止めてあげよう

狂えるだけ狂えばいい
快樂の果てが墮落だとしても

I break your memory
現実と引き換えに

I break your mind
理性は冷静極まりない

ありがちなシチュエーションを前提
ありえないシミュレーションに耽溺

I always break you in my dream

魅せられた写真

お前みたいに素直になれたら...
いつもその背中を追いかけてきた

届くはずのないその勇姿
異国の言葉がよく似合う佇まい

作為の欠片もない笑みや
途上国の子どものように眩い瞳

いつだって見つめてくれた
痛いほど感じとっていた

いつだって想ってくれていた
塞ぎたくなるほど照れくさかった

どこにだって行ける気がした
気にかけてくれる限り

どこまでも飛べる気がした
そこにいてくれるかぎり

臆病なモラトリアム

探すことから 未来を切り開ける
臆病なモラトリアムにはなりたくないけど
始める事もなく 終わりを告げようと もがいている
その気もないのに 迷ってる振り

寂しすぎて 何も言えない
1人で生きてきたつもりだったけど
孤独にもなりきれず 自己陶醉ばかり

誰も来ない このままじゃ
それでよかった 頃もあった

気づけば 何も手にしてない

何1つ選択してこなかった
「時間がない」 「才能がない」
同じようなことを口走っては眠りについた

扉に刻まれたあの日の証
あれから幾度の無為を見逃してきたの？
生の軌跡は痛いほど無邪気なまま

10年前の自分を写真で見つけ
あの頃と 何も変わってなくて 涙が出た
おかしいよ 何やってきたんだろ

気づけば 何も築けてない

曇り空を仰ぎ 眩しくもないのに
瞼を閉じる決意をしていた

気づけば 何も失っていない

「未来がない」
誰もが笑ってごまかす もうウンザリなんだろう？

気づけば 何も奪えてない

ママに嫌われないように その瞳を心で受け止め
パパに嫌われないように 寡黙な優等生になりきろうと暗示

気づけば 賢くもない

テキスト片手に それなりの制服で それっぽい言動
現実って 時に味気ない

気づけば 馬鹿にもなりきれない

明日を閉じることで 過去に生きられる

ずっと信じてきた

ずっとそれしか知らなかった

気づけば カッコ悪くもなりきれない

恐くてしょうがないんだ Who is a hero?
僕なんてどうでもイイ奴なんだと思うと

When does he come ?

誰一人愛せなくて
誰一人救えないと思うと Who is a hero ?

寂しくてしょうがないんだ When does she take me far away ?

誰一人 ちゃんと目を合わせれなくて
誰一人 ちゃんと素直になれなくて I go on trusting you

もうどうでもいいんだ
僕は良くも悪くもなれないから I go on closing my eyes

もうどうしようもない？

誰かをずっと求めてきた
ふと、こんな世界から拾い上げてくれる誰かを I go on screaming in my eden

誰かは 絶対いるって I want to be a hero

誰かは 絶対来てくれるって I go on waiting for the miracle

誰かは 凄い良い人だって... I think that a hero is me...

ナンパ

終電で君と 通路を隔て隣り合う

もしここで

「メルアド教えてくれない？」

なんて聞けたらいいのに

飾らずに 正直に

君が気になるんだよ 今

この想いはただ、今この一瞬

そうってはあきらめてきたのが

僕って人格

たぶん君は何気ない顔で

「いいよ」って言ってくれそう

でも、その「いいよ」は
そこまで深くない

だから僕は今日も臆病なまま

こんな小さな部屋で
いったい何をしてきたんだ

たかだか知れてる
抜け出さなければ始まらない未来

問いかけるのはもうやめよう
そろそろ自己の殻を破り捨ててみたら

遅すぎるくらいだけど
潜在的な可能性は0じゃない

わかってるだろ？ 自分自身が1番

空を見上げれば
絶望のカケラさえ見当たらない星空

何に悩み

何にためらっているのか

全く持ってわからなくなる

このまま吸い込んでくれないかい？ 黒き大空よ

このままいなしてくれないかい？ 月明かりよ

解き放たなければ 誰も気づいてくれない

一番知ってるのは自分自身

光をたぐり寄せることも出来ない

一番逃げているのは自分自身

さあ、ゆっくりいこう
君のリズムでただ前へ

中途半端も込みで君の生き様さ

夢想少年の叫び

悲しみは味わうためにある

そう思えば少しは気分も変わる

持ち方次第だよ 何事も

捉え方次第だよ 今日一日も

誰かここで言ってくれないかな

時間切れの迷路に迷い込んでいるみたい

出口は見えてるのに 足はすくんだフリを通す

入り口に戻ったところで

リスタートってカッコつけれそうにない

僕は強くなれないよ よくわかっているつもり

僕はカッコ良くなれない 1番よく知ってるよ

ただここにギターがあって

シャーペンとノートがあれば

それだけでハッピーな平日の午後

ごめんね ママ

今は駆け抜ける想いに身を委ねさせて

音のする雨

この世界に降りしきる雨

目の前に横たわる少女に傘を差し出してみても
笑顔を取り戻せるわけもなく

花びらひとひら もぎとることもできず
知ったふりして 何一つ見えず

すれ違う少年に傘を差し出す
それぐらいしか思いつかないなんて

小さな笑みにふたつの微笑み

通りすがりの幸福は 壊したくなるほど鮮やかで

ずぶ濡れなのに かける言葉も見つけない僕に

非常な現実を見せつけるかのように降りしきる

逆らい続けて

羽ばたき続けて...

突然の自責

どうして泣いているの 立ち尽くしたまま

何をすればいいのかわからない 進むでも退くでもない

そんな日々を繰り返しています

ある日、夢の奥で見つけた幼き自分

冷めた目で今の僕を睨みつけた

「お前のせいで輝けない」

ごめん、キミを引き立たせられなくて・・・

「ここまで積み上げてきたのはお前だけじゃない」

恐いほど無邪気に優しく告げられ...

気づかないように 気づかれぬように

夢の先へ 飛んでゆこうよ

華奢な彼女

あの頃のまま
出逢ってしまった街角

変わらない自分は ただただ夢中

随分、変わってしまったあなた
輝きに溢れる瞳を残したまま

抱きしめた瞬間

夢は終わり 儂い現実には震えた

いつかの夢の中で見た 憧れの景色
飽きるほど抱きしめてきたあの夜も

抱きしめた瞬間

思いの外 空虚な時が流れ始めた

別れるために出逢った
始めから気づいていた

眩しすぎるあなたに
少しでもふさわしい人でありたくて

背伸びばかり

それを見透かしたように 華奢なラインに揺れるフリル

優しい声を聴けるだけで充分だった

思い出した瞬間

同じ答えを交わし 踵を返した

それぞれの最愛を見つけたら
電話でもしよう

そのときは きっと素直に出逢えるよ

それぞれ

それぞれの意味を求め続け
それぞれの意義を重ね合う

擦れ違いを葬るように歩み寄り
合意は相違と妥協の抱き合わせ

聖なる宿命
何気ない日は狂気に色づけられ
人々は「民間人」とくくられる

終わらない情景には
愛が溢れすぎている

それぞれの愛を守るため
それぞれの愛が罵りあう

終わらない日々は終われない世界を
突き放すかのようにただ流れていく

それぞれの火が消えたとき
宿命を灯し 胸に刻みつけていく

光の束からこぼれ過ぎる 無邪気
無機質な街並みに突きつける

日々が世界にあきらめを覚え
その隙に世界は日々を飲み込む

憧憬に憧れ

うつむいて うつむいて
歩いて 歩きつづけて

忘れられない
自分でも何を言っているのかわからない感情

無邪気にたしなめるその笑顔
初めて正面から見れたよ

小さなひまわり
あなたはきれい

予定通りにはいかない現実
全て完璧だと思っていたのに

出きるだけ笑顔　なるだけ優しい声
それでも惑わされない芯の強さ

何か全部　捨ててみたいな今
ただそこだけを見ていたいんだ

現実的になりきれない
夢に侵され続けている月

零れ落ちた言葉たち
あれを加え これを削って
そんな後悔ばかり

放たれた光 小さな光
届かなくてもいい

そんなつもりで放った光
もう戻らない瞬間

傷つきたくなくて
もっと違う自分に逢いたくて

繰り返し 繰り返し
探して 探して

ウシロマエヘナラエ

時間の狭間で揺れる光は あの日の影

追い求めては戻せない現実

眺めていた窓からの空

追い風を肩で透かして 響かない心を隠している

どうしてトビタテナイノ？ どうしてヒトミヲゆらすの？

=で見出せる答えが欲しい

わがままばかり それが私の持ち味

勝って気ままな態度

時代に即した外見

趨勢から外れ過ぎない見識

真面目すぎた日々の積み重ね

答えはわかっていたはずなのに

見えないふりで通してきた自分が居た

どうして忘れられないんだろう

こんなに時が経ったのに

心はあの頃のまま

変わらずに叫んでいる

今からでも遅くないよ
笑顔のよく似合う先輩の声を聴いたのは
いつのことだっただろう

結局今もあの頃の夢に 震え続けている

さあ ゆこう どこへでも

さあ ゆこう 君の望む場所へ

さあ ゆこう 懐かしいあの町へ

さあ ゆこう 憧れの都市へ

さあ ゆこう 少しでも遠くへ

さあ ゆこう 逃げるように

さあ ゆこう 明日にでも

駆け出すほどにはいかないけれど
一歩の力を信じていきたいの

jikan

sukuiyounonai yatsujyanai
それだけわかれば すすめる
bokurani hitsuyounanoha soredake

- じかんがない -

ただ叫び続けていた 声なき声を

破れない あるのかどうか わからない壁
ashitaninareba 'Pa'tto kieteshimaisouna kabe

- 時間がない -

誰かが気づいてくれると理由もなく信じていた

furihodokerunoha kyounisumau bokura

どれだけはばたいても だれもみとめてくれない

- じかんがない -

ただ叫び続けていた 意味なき言葉を

sonna itonamiwo nagesutete mitakunaru

それでも 僕等は 羽ばたく

- 時間がナイ -

やるせない想いをごまかすように

- じかんがナイ -

ただ叫び続けていた 脈絡なき音を

- 時間がナイ -

誰にも聞こえないような声で

ジカンガナイ

Time cries

弱虫で何も言えなかった頃に
今の自分が戻れたとしたら

素直に力強く
「好きだよ僕も」と言えるだろう

そんなことは無理で
そんな気も今はない

流れ 流れ続けていく
時に悲鳴のようにも聴こえる

何も変わらない夏空のきらめき
少しでも前へ 少しでも上へ
スローガンは中々染み込まない

時が 時が叫んでいるよ
ノイズのように混じるのはあの声

強いられることもなく
悟られることもなく
ジユウに ジユウに
思い立てば いつでも どこでも 1人でも

そんなの無理だよ
言ってみたかった ずっと
言ってみたい 今でもまだ

流れ 流れ 続けていく
時が 時が 叫んでいるよ
無常に変わり続けていく街並み

時に悲鳴のようにも聴こえる
ノイズのように混じるのはあの声

Repeat

止められなくて 切な過ぎて
理性じゃくくれない 本能の反射

ふれてしまいそうな 落ちる直前に
こぼれる微笑 不気味なくらい

止められなくて 切な過ぎて
一度の過ち 墮落のループへ

止められなくて 刹那に寄り添い
気疲れの代償 ほとぼしる熱気でごまかして

途切れない連鎖
果てない鼓動
揺れる刹那が世界を開く

一度きり そんな繰り返し
懲りない本性 必死に取り繕う理性

ささやかな祈り ある種の祈り
綺麗ごとだけ そんなの夢物語

大きな橋のあるあの場所へ
今夜ゆこう
今夜じゃなきゃ始まらないような気がするんだ

イデア

断ち切れない呪縛があるとしても
まるで悲劇のヒロイン気取り

寂しいよ 今でも
行きたいよ どこまでも
似ているよ どこことなく
かけたいよ 何気なく声を
笑いたいよ そのために

しかめっ面 もう飽き飽きなんだ
影を背負い 光を遮り

飛び立てない羽ばたき始め
切ない日々は空しい

求め続け 吐き出し続け
初めて気づく深層心理
言葉にできないメロディー
音にならない言葉
たとえ空虚な時を切り裂けなくとも
この喧騒をわずかでも緩めれるなら

きつとここに来てみたかった
ずっと来てみたかったんだ

しゃべらないでいいよ
ただただ 側に居たいだけ

振りほどけない微かなきらめき
伸ばしきれない僅かなとまどい

晴れ渡る空に架けられた虹
調和を凌駕した色彩を誇る

ジブラルタルの夜空
託された無数の光をたぐり寄せる

きつとここに来てみたかった
ずっと来てみたかったんだ

eye-line

今すぐあの時に戻って君の元へ
視線すらまともに交わず
あきらめていた

振り向いて 願うだけ
今すぐ駆け戻り 君だけの元へ

今度こそ振り向いて さり気なく高い声で
傷つかない 傷つけない

それは自分を守りたくて
君に嫌われたくなくて

想いよ どうか届いて
消えてしまう前に

願いよ どうか届いてください
涙が濁ってしまう前に

ほのかに白い花びらが散る頃
素直にできなかった季節

字を追うごとに 画を見返すごとに
瞳は儚く揺れる今も

込み上げてくるのは後悔
今すぐ拭って駆け戻りたい

未決

凍えた空の下
歩き始めた潜在

危機的な日常に スパイスは溢れすぎ
刺激とはなにか？ 求めてはばからない

気づいて欲しかった
気づいてくれたところで 何もあげられないだろうけど

おぼろげな記憶
辿るのが役目だと信じてきた日々
笑顔はなるべく抑え 言動は慎ましく
刺激の物足りなさは言葉遊びで埋めるように

気づかせようと
いつもそちらばかり 気にしていました

食い入るようにはいかないけれど
言葉にできない 音にならない
言葉にならない 音にできない
そんな心の詩を届けたい 今

掻き鳴らせ
その声でいいんだ 汚くても
失われた月日を取り戻そう

描き散らせよ

そのタッチでいいんだ 理由はなくても
必死で駆け抜ける決意は儂く流れ

書き続けろよ

遅くてもいいんだ あきらめなければ
相変わらずの冴えない日常を再生し続けている

可視

撃ち抜かれた

何でオレなんだ？

導火線にかざすアルコールランプ

決めかねた決意が判断を鈍らせた

運命の糸らしきもの

真偽は別として

この街の至る所に垂れ下がっている

赤い

笑っても怒っても

絵に描きやすい頬だよ

木漏れ日 夢遠く

導いてほしい 初めての祈り

可視 すべてが委ねられた

カナシミガくるくる

くるしみがカラカラ

儚さに倒れそうになり

苦し紛れに過去を抱き寄せる

ラジオに似合う曲が聴きたいってよく言ってたよな

だけどラジオをつけるとつまらなそうにしていたよ

ほら戻ってこいよ 電話でもいいからさ

部屋はいじってないんだ

可視 よく見えるよ

瓦礫の山を見れば充分だよ

それでも祈るしかないんだ

たぶんどうしようもない所にあるのだろうけど

4 o'clock before daybreak

4時過ぎの屋上通り沿い
傷つけたいつかの影 ふりほどき
得意げに夜空へ翼をかざす

聴こえないふりをしていた
めんどくに巻き込まれなくなかった
自分勝手だとは思わなかった
「自由気ままですね」
そんな代名詞をつけられた

あふれだす
気づけないのは気の毒
気づけたのは幸運
小さな庭で奪い合っている

ゆっくりと微笑む その横で気づいた
今夜ここですべてがなくなろうとも
お前だけはずっとここに居続けてほしい

星々の描く宇宙はあまりにも出来過ぎている
それと比べたら俺らなんて...
そう いつだって充分にはいかないのよ
世の常だわ

どこに行ってもいい

優しく告げられたが揺るがない決意は
未だ生まれていない

待ってるのはミラクルじゃない
そうすべてはタイミングにかかっている

繊細な風に誘われ
いつか見た夢を今夜もう一度

なびく風と共に髪をかき上げ
錯乱したまま明日へのキス
引き留めておきたい　ここはとりあえず

雲の切れ間から一筋の光
運命的に導かれていく
そんな夢を繰り返し再生

時空を越えておはよう
まだどこか切なさがあふれている
驚くこともなく呟いた

綺麗だよ　思わず溜息がこぼれる
昨日会ったばかりなのに

軌道修正の闇

夢はないけれど
現実もしっかりと見据えてきたつもり

さりげない仕草 何気ない行動
積み重ね 積み重ね

ろくでもない思いつき
奇跡でも起こらない限り
たぐり寄せられないような

痛みは痛みとして受け止め
喜びは喜びとして噛み締め

揺れる心象は遠く
強がりはいつだって
いつの日かの勇気を呼びよせる

輝く保障なんてどこにもないけれど
今日も流れ星をお願いします

走っても走っても ゴールは見えない
とりあえず 逃げ出して逃げ出して
後のことは野となれ山となれ

夢がないから現実は幻想のようだった

無責任なんて言わないで
責任なんていらないんだ

少しでも少しでも 喉は潤いを求める
ゆっくりとゆっくりと 休日のようにティータイム

なぜ僕はまだ生かされているのでしょうか？
とりとめのない問いに困り顔

誰か与えてくれよ 僕にも
誰か拾ってよ 僕も
ちっぽけな僕にも可能性はあるって

IRREPLACEABLE

何でいつもよく笑うのか
不思議に思いながらも和ませてもらっていたよ

悩みなんてモノとは
無縁の日常を過ごしている人なんだな

きっと

そう思いながら眺めていたよ

まさかそんなものを抱えているとは知らなかった

泣くのが辛くて笑うことしかできなかった
そんな切ない心の声をふいに漏らしてくれた

僕はとまどいながら少し嬉しかった

人から必要とされている感覚を
初めて味わった気がしたから

ドラスティックバース

1人でも救いたい 1人でも気づかせてあげたい
少しでも進める 僕等はそれなりの可能性を秘めている

怯えなくていい 泣きたければ泣けばいい
そっとその時に隣で 寄り添えるようなメロディーを

怯えた小さな背中 かける言葉はすくむ
掻き鳴らされる旋律
その横で静かに詩を読むと約束した

ありふれたリズムさえ ありふれた現実さえ
君が眩しく描いてくれるから

後悔から生まれる歌で眠れる可能性の群れを率いる
先駆者とはなれなくとも

あなたの奏でるメロディーは美しい
言葉があふれ過ぎるよ

気づけない心に届くように
気づけない心に響くように

fly shine forever

どうして繰り返してしまうんだろう
どうしようもないくらい気になる

出会うために生まれてきた
なんて言えたなら
もっと違う出会い方だったなら

たぶん変わらないとわかっていただけ
背伸びばかりで素直になれなくて

苦しいよ 想うほど
切ないよ 忙しいほど

You always fly in your imagination
So you can shine forever

とっくに失っていたはずの奇跡が
音もなく舞い降りた
そんな夢を 繰り返し 繰り返し

I always fly in your imagination
So I can't shine forever

風のない夜

響かない詩を作り続け今に至る
あの時もっと気の利いた言葉をかけてあげれたなら
気づいてくれたのかな

私の声は届かない　　なんでそう言いきれなの？
構ってくれて嬉しかった

気づかせてあげるべきだったのに
口に出るのは　「気づかせてみて 僕のため」

思い返すたびに後悔が押し寄せる
涙よりも早く

気づかせてあげるべきだったのに
口に出るのは　「歌ってみせて 僕のために」

憧れの貴方達に少しでも近づきたくて
カッコつけてすかしてばかりだった

思い返すたびに立ち止まる恐怖に駆られる

どうして歌は失われてしまったのだろう

どうしてメロディーはまだ枯れないのだろう

儚げな炎が怯えたように揺れる

それは風のない闇の中

綺麗な整理

込み上げてきたのは歳月の積み重ね
眠れる心はざわめく

知ることが恐かった 知ろうともせずに
浮かばれない心が今も聴こえるよ

This is a problem of mind
He surely said so

隠せないの心を 素直が一番とは限らない

That is also a problem of mind
She said in a small voice

あきれた世俗の声を踏みにじるかのように
マイペース

This is a problem of mind
He surely said so
That is also a problem of mind
She said in a small voice

綺麗な空が見たい
そう呟けば雲は流れていく

雨の好きな人は傘をかざす
雨を必要とする人は天を仰ぐ

事の大きさに気づけなかった
私の脳裏にはそんなセリフがかすめ始める

薔薇色コンタクト

相変わらず水彩画の一部みたいだな
嫌になるよ 隣に居るだけで

愛しくて抱けなくて ごめんね
変わることもなく 離れていく

追いかけてくる瞳によんだこの瞳を重ねた
隠していたきらめきが溢れ出す
怖れていたのはこの瞬間

何とか燃えたぎる鼓動を静め
少しだけでも裏の裏の顔を引き出して

溶け始めの奇跡にしがみつく
透明なままここで話し続けていたくて

崩れ落ちても 戻れはしない
崩れ落ちたところで終われるはずもなく
振り向いてくれるわけじゃないよね

消せないキズアトを水面に浮かべ
そう 君に伝えるよ
今だから言える真実

その瞳に吸い込まれ
もう何も手をつけられない
いい訳くさいけど正直手に負えないよ

薔薇色に染めたはずの時

移りゆくのはその心

薔薇色に染められたはずの時

変わらないのはこの心

気づくのはそう遠くない朝

花火大会

あくびばかりの駅のホーム
いつの日か声をかけられ
鮮やかな世界へのチケット
渡されるのを夢見る少女
あり得ない わかっている
運命はたぐり寄せられると信じ
夜な夜な励む健気な姿は清らかで

きつと きつと 願いつづけ
きつと きつと 超えていく

そびえる高層 叫んでいるよ
そろそろ限界 そろそろ限界
似ているよ 僕みたいだ

傷つくことが恐くて 泣く事もできなかった幼き日々
泣いてもいいんだよ
ドラマみたいに効果的なタイミングでいい人は現れなかった

気づかせたいよ もちろん
この歌を口ずさむ理由はそのためなんだから
でも気づかないよ たぶん
あまりにも遠すぎるからね

空よ そんなに光らないでくれ

眩し過ぎるよ 泣きながら叫ぶことはないじゃないか

場違いなほど 眩しく眩しく

長いまつげの下に映るのはあの日の影
それともあの憧れ？

綺麗過ぎるから 切なく切なく

寂しげな花を見つける横顔に見惚れていた

毎日が溢れていく きらめくきらめく

遠くの海で今日は花火大会
それは昨日のように胸に迫り来る

時間は止められない 夢でも夢でも
キスしても縮まらない 離れる離れる

抱き寄せる 焦りながら焦りながら
とまどいながら真夏を抱き寄せる

見上げた空はどこまでも果てしない
気づいた 君もこの空の下に居る
それだけで充分じゃないか

会えない夜 会えなくなった朝
二度と出会えないかもしれない それでもいいんだ

君が今日もどこかで何気ない日常を過ごしていると思うだけで

紫のトランクケース

待ちわびていた風に乗る さよならの季節へ
君だけを取り除きたい この記憶の片隅から

扉の向こうには光があふれている
信じる力は果てしない

あふれすぎた夢 溢れ過ぎたお話
描ききる前に疲れ果てる こんな日常でユメなんて持てない

時間がほしい I want more time
ありきたりな答え I want more time

捕らわれた日々の狭間
君がいて 僕がそこにいる それだけで許し合えた

錆びついたカラシニコフ
飾り立てたつま先
流された欠片達
38 flowers
こなれた唇
いなすように制すは小さな左手

止みかけていた風を誘い さよならの季節へ
君達を取り除く この時の中心から

緑のポラロイドカメラ

止みかけていた風を誘い 始まりの季節へ
左手をひいて行く この世界の果てから

扉の向こうには未来があふれている
信じ込むことから始まる季節

静かに微笑む横でそっと手を握った
特別な感覚に落ちていった
初めてなのにどこか懐かしい
重なる意味を教えてくれた日

見つめるたびに落ちていく
どうしてこんなにも気になるのだろう

破れかけのシースルー
渡された飴細工
賢く幼い瞳
38 flowers
0時過ぎのワンコール
隠し切れないのは後ろめたさ

待ちわびていた風に乗り 始まりの季節へ
君の手をひいて行きたい この景色の片隅から

芸術的な花々
夜な夜なちぎられたままの姿
器用に歩み始める

急がなきゃ 誰のために？
もちろん自分のため そのはずだった

しがらみだらけの花壇
いまいち煮え切らない態度
ためらいがちに縮こまる蕾
どれもこれも冴えない表情

大前提が揺らぎ 心は脆く閉ざしたがる
枯れかけた雫はふいに押し寄せる

吹き荒ぶ風に飛ばされまいと身を寄せ合い
気まぐれ風に水先を尋ねる

探していたものをふと見つけた
気まぐれ風に乗って

探していた人に出会えた
枯れかけの花畑の先で

芸術的な花々
夜な夜なちぎられたままの姿
器用に歩み始める
奪われた心を探すため
光のない海の方へ

浮遊自由

掃き溜めのように濁る空

時間がない

口に出し始めたのはいつのことだったろう

あきらめに遡っていく

築き上げられた心の階段 すべては昇るために

下るといのは沈むことを意味する

誰からともなく叩き込まれ 見下ろすことさえはばかり

星空を来る日も来る日も見つめ続ける

すべてがステージだとしよう

- そんな前提には誤魔化されない -

そうすれば自分を位置付け

進むのも退くのも変わらないと思えるはず

- 言い切れないのなら言わないでほしい -

日々は途切れない 何気なく過ごしているほど

- 途切れそうなくらいがいい -

小さく小さく見せようと
小さな小さな体を丸めて 視線は床をなぞるように

地味に小奇麗に 第一印象に忠実に

少しだけ 身につけてみて
たぶんよく似合うから

そう勇気を出して
ちっぽけだからなんて言う前にさ

完璧だよ 君は
光の中に飛び込める自由を抱いている

笑ったり 泣いたり 怒ったり 喜んだり
そんな感情ではくくれない日もあるだろう

そう回り続けているんだよ

君は今呼吸の中に居る

息づかいが耳に障る　でもそんなに居心地は悪くない

ゆっくりと足を入れてごらん　そこまで冷たくはないからさ
ゆっくりと潜るんだ　見つめる事から始まる

きっと世界は君のために今日もここにある
そう思ったほうがすべては上手く回る

感情を分析するにも踏み出してみないと

思い立てば　明日からでも変われる
景色が単調なら　なおさら君に駆けてほしい

世界があくびばかりしているなら
なおさら君に賭けてみたい

人見知り

あの時その視線を見つめる事しかできなかった
さり気なく言の葉を添えていたなら
今頃君の笑顔を毎日のように見れたのかもね

不思議なくらい繰り返していく中
すれ違いは数え切れない
何気ない一声が思いも寄らない言動力
そんな夢みたいな話が当然のように起きている
広々とした陽射しの下で

自らが狭めた時間に縛られつつ
背中を丸め続けている
平等に与えられているのに
その尊さにはそれぞれの温度がある

枯れる気配のない太陽
届くはずのない標的
憧れはやがて嫉妬

あの時その視線を振り切ろうともしなかった
言の葉が添えられるのを待ちわびていた

ただ待ちわびることしかできなかった

なんで私じゃない？
聞こえてくるたびに目にするたびに問いかける日々
たいした知識のない凡人にも悲しみの深さ
痛みの果てしなさは胸に迫り来る
きっと悪い夢を見ている 長く果てしない悪夢を

何もかもが窮屈で 何もかもが敵のようで
わけのわからない不安に押しつぶされそうで
今にも事を起こしてしまいそうな淵を漂っていた

こんな退屈な日常に鮮やかな風を吹き込んでくれた貴方
軽やかに駆け回る姿 いつまでも見つめ続けていた
永遠を手に入れたような そんな気分で過ごした

なびく黒のセミロング 光る白のブラウス
プール際のフェンスで見上げた9月の空

何もかもが水彩画のように淡く 何もかもがつややかに透明で
何もかもが眩しく見えた

自信持てない日々 深く潜り込んだ海はどこまでも広く青く
澄んだ瞳は絵に書いたようにつぶらで 失いたくはないと初めて強く思った

今までに見てきたどんな映画より

今までに聴いてきたどんな音より

今までに読んできたどんな話より

今までに訪ねてきたどんな場所より

今までに切り取ってきたどんなシーンより

今までに奏でてきたどんなメロディーより

今までに書き綴ってきたどんなストーリーより

今までに過ごしてきたどれほどの日々より

今までに描いてきたどんな風景より

きらびやかな風景をこの身体に詰め込んで

貴方にあげたい いつの日か

この詩集をダウンロードしていただき、ありがとうございます。

何か心に残る作品はあったでしょうか？

詩のブログの「Blue Blank」と「Spring System」の中で、傑作評価を頂いた61編の詩。

この詩集には、「歌詞のような詩」ということを意識し始めたブログ初期のエッセンスが詰まっています。

これをきっかけに、詩のブログ「橙に包まれた浅い青」(<http://komasen333.blog.jp/>)に興味を持っていただけたら幸いです。

これからも電子詩集やブログで

1人でも多くの方に響く詩を模索しながら、良質な作品を綴っていきたいと思います。

この詩集をダウンロードしていただき、本当にありがとうございました。

読んでくださったあなたに、幸せの種が訪れますように。

【橙に包まれた浅い青】

<http://komasen333.blog.jp/>

【電子書籍】

<http://p.booklog.jp/users/komasen333>

【現代詩フォーラム】

<http://po-m.com/forum/myframe.php?hid=6982>

【無限な無心な無色なシャイニング・ブライトリー】

<http://blog.livedoor.jp/sakowha333/>

【なんちゃって自己啓発の詩想 ～ ポジティブ ポエトリー ポッシブル～】

<http://positivepoetrypossible.blog.jp/>

【Life Love Laugh ～変わる心は恋のせいに 変わらぬ心は愛のおかげに】

<http://lifelovelaugh.blog.jp/>

【エンプティ エン エターニティ】

<http://komasen333.hatenablog.com/>

【 photo photo photo 】

<http://photo3.blog.jp/>

【禁カフェイン→脱カフェイン→減カフェインに下方修正】

<http://nocoffee.blog.shinobi.jp/>

【 YouTube 】

<http://www.youtube.com/user/komasen333/videos>

【SUZURI-オリジナルグッズ】

<https://suzuri.jp/komasen333/products>

【レポート・論文】

http://www.happycampus.co.jp/docs/983431505701@hc05/?docs_num=&m=2&v=&t=&e=&_a=list_bar

[Twitter]

<https://twitter.com/komasen333>

[note]

<https://note.mu/komasen333>

[VALU]

<https://valu.is/komasen333>

[Gridge]

<https://gridge.com/komasen333>

61 Blue Spring

<http://p.booklog.jp/book/31359>

著者 : komasen333

【 詩のブログ 】

橙に包まれた浅い青 <http://blogs.yahoo.co.jp/komasen333>

【 お問い合わせ 】

comasen2003-333@yahoo.co.jp

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31359>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31359>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.